

# 「肝炎」大発生のおそれ 諫早

3月13日、諫早市社会福祉会館において熊本保健科学大学衛生技術学科高橋徹教授が市民ら150名に「諫早湾調整池の真実」と題し講演を行った。講演の要旨を掲載する。

## 農水省信用できるか

農水省は諫早湾調整池の水が農業のために必要だという。調整池には毎年夏にアオコが大発生しているが、アオコは日本中どこにもあるから大丈夫だそう。本当に信頼して良いのか。海外では死亡事故まで起きている。私の研究室で把握した事実と考えられるリスクを考察する。

## 諫早調整池の実態

調整池は農業に必要なと言うが、調整池の大部分の水は農業に使えないし、実際には使われていない。九州農政局は「新しい生態系の創造」とうたうが、調整池では欧米の基準なら専門委員会が緊急招集されるほど大規模なアオコが発生している。

## アオコとは?

アオコは30億年以上前に出現したシアノバクテリアの仲間です。

イ藻等の真核植物プランクトンより構造が単純で、その分、増殖速度が速い。

## アオコ発生の事情

九州農政局の公式データによると調整池ではチソンが極端に変動し、リンが異常に高い値を示している。この異常な環境が真核植物プランクトンではなくシアノバクテリアを育てる要因と考えられる。また、透明度が低いと沈水植物や真核プランクトンが増殖できず、表層でシアノバクテリアが一人増殖しやすい状態になっている。



第二の水俣病発言に会場からは驚きの声[諫早市]

## アオコの毒素

## 青酸カリ数十倍の急性毒性

シアノバクテリアには強力な毒を出すものが出て、調整池で確認しているミクロキスティス・エルギノサは青酸カリの数十倍の急性毒性を持ちアメリカ国防省が生物化学兵器の材料に指定しているミクロキスティン(MC)を生み出す。ブラジルではMCにより50人以上が死亡する事故が起こり、世界中で問題になっている。MCは急性毒性だけでなく慢性肝炎や肝ガンを引き起こす。MCは植物の根毛や気孔から入り野菜に残留する。海に出た場合、海水をろ過する二枚貝に蓄積したりプランクトンを通じて海産動物へ濃縮する。さらに、アオコにはMC以外にも強力な神経毒を生み出す多くの種類がある。

## 調整池のミクロキスティン

2007年9月、農業用水採取所付近を含む調整池の4か所から水と泥を採取し分析した結果、全ての自らWHOの基準を大きく上回る濃度のMCが検出された。九州農政局も検出している。2008年にいったん低下したものの2009年には再び危険な濃度となった。泥に含まれる水からは超高濃度のMCが検出され残留性が高いことが分るとは危険である。

## 開門「そ唯一」の方法

「開門すれば汚水が外に出てく」との意見は事実誤認である。今でも排水は頻繁に行われMCに汚染された水は毎日、有明海に排出されている。このまま調整池の水を一方的に有明海に排出するだけでは、水俣の過ちを繰り返すこととなる。アオコは海水に触れると死滅する。今は、一刻も早く調整池内に海水を導入し(現在問題になっている「開門」は海水を導入するための「開門」。調整池水を排出するための開門は今も行われている。MCの生産を止めることが重要である。毎年30億円もの費用を使って水質浄化を行っているが効果がなく、栄養に富んだ調整池ではアオコが育ち、排水によって海面に広がり赤潮を発生させる。農業用水にも使えず漁業者ばかりでなく農業者をも苦しめることとなる。また肝炎患者が諫早湾沿岸で蔓延する大規模な健康被害の恐れもある。

干潟があれば、栄養塩は泥の上でケイ藻等の無毒な植物プランクトンを育て、貝や小さな動物プランクトンを育ててきた。豊穡の海はこうした干潟とそこに暮らす生物によって支えられてきた。

潮受け堤防の開門は、失われたエコシステムサービスの復活につながる唯一の方法である。